

テーマ展示編



■ 啄木と家族の道程 ■

第1章 故郷の家族とあこがれの時代

No	書名	編著者名	出版者	出版年	請求記号/所蔵先	館外貸出
1	啄木の父一禎について	尾崎 元昭 〓 [著]	[尾崎元昭]	[1994]	タ/オ70/2	
2	啄木の母方の血脈 新資料「工藤家由緒系譜」に 拠る	森 義真 〓 編集 佐藤 静子 〓 編集 北田 まゆみ 〓 編集	遊座昭吾	2008. 5	タ288. 3/刊	○
3	石川啄木骨肉の怨	西脇 巽 〓 著	同時代社	2004. 1	タ/910. 268/ ニシ	
4	石川一禎と葛原対月写真 (パネル)	—	—	—	【画像出典】 『啄木写真帖』より	
5	兄啄木の思い出	三浦 光子 〓 著	理論社	1973	タ/ミ2/2	○
6	悲しき兄啄木	三浦 光子 〓 著	初音書房	1948. 1	タ/ミ2/1	
7	別冊太陽 石川啄木 漂泊の詩人 没後100年記念	—	平凡社	2012. 5	タ/910. 268/ イシ	○
8	啄木の父一禎・啄木と堀田 秀子	高橋 幹雄 〓 著	関西図書出版	1998. 5	タ/910. 268/ タカ	○
9	啄木と渋民	遊座 昭吾 〓 著	八重岳書房	1971	タ/ユ1/1	○
10	石川啄木記念絵葉書	—	啄木会	[出版年不 明]	タ/9/7	
11	啄木写真帖	吉田 孤羊 〓 著	改造社	1936	タ/ヰ1/1	○
12	婚約時代の啄木と節子写真 (パネル)	—	—	—	【画像出典】 『啄木写真帖』より	
13	啄木全集 第3巻 書簡評論感想	[石川 啄木 〓 著] 土岐 哀果 〓 編輯	新潮社	1920	タ8/1/3	
14	石川啄木日記1 明治39年12月26日日記(パ ネル)[『石川啄木日記1』より]	石川 啄木 〓 著	世界評論社	1948	タ5/3/1	
15	明星 第3第5号(複製版)	『明星』複製刊行会 〓 著	臨川書店	1979	911. 05/ミ 1/3-5	○
16	啄木新婚の家写真(パネル)	—	—	—	—	
17	啄木の妻節子	堀合 了輔 〓 著	洋々社	1981	タ/ホ3/1	○
18	かなしき時は君を思へり 石川啄木と五人の女性	山下 多恵子 〓 著	未知谷	2020. 10	タ910. 268/ヤ マ	○
19	黄草集	石川 啄木 〓 [著]	盛岡啄木会 トリョー・コム (発売)	1976	タ8/29	○
20	あこがれ	石川 啄木 〓 著	小田島書房	1905	タ15/21	
21	小天地 第1巻第1号	石川 一 〓 編	小天地社	1905. 9	タ9/6	

No	書名	編著者名	出版者	出版年	請求記号/所蔵先	館外貸出
22	小説 雲は天才である	石川 啄木 著	第一書店	1947. 6	々3/1	
23	石川啄木日記1 明治39年12月30日日記(パネル)[『石川啄木日記1』より]	石川 啄木 著	世界評論社	1948	々5/3/1	
24	啄木の長女・京子(女学生時代)写真(パネル)	—	—	—	【画像出典】 『啄木写真帖』より	
25	石川啄木日記 1	石川 啄木 著	世界評論社	1948	々5/3/1	
26	啄木の父一禎と野辺地町	高松 鉄嗣郎 著	青森県文芸協会出版部	2006. 9	々910. 268/々 カ	

第2章 一家扶養の現実の中で

No	書名	編著者名	出版者	出版年	請求記号/所蔵先	館外貸出
27	石川啄木日記1 明治40年5月4日日記(パネル)[『石川啄木日記1』より]	石川 啄木 著	世界評論社	1948	々5/3/1	
28	石川啄木日記1 明治40年9月6日日記(パネル)[『石川啄木日記1』より]	石川 啄木 著	世界評論社	1948	々5/3/1	
29	紅苜蓿 第6冊(復刻)	—	函館市文化・スポーツ振興財団	1991. 10	々/ベ 1/1-6	○
30	函館・苜蓿社同人と石川啄木写真(パネル)	—	—	—	【画像出典】 『啄木写真帖』より	
31	函館の砂 啄木の歌と私と	宮崎 郁雨 著	東峰書院	1960	々/ミ3/1	○
32	釧路新聞(複製) 明治41年3月11日	—	釧路新聞社	1908. 3	々071/々 /1908-3-11	○
33	釧路新聞社写真(パネル)	—	—	—	【画像出典】 『啄木写真帖』より	
34	石川啄木全集 第5巻 書簡附年譜	石川 一 著	改造社	1929	々8/3/5	
35	金田一京助全集 第13巻 石川啄木	金田一 京助 著 金田一京助全集編集委員会 編	三省堂	1993. 7	々081. 6/々	○
36	金田一京助と石川啄木写真 (パネル)	—	—	—	【画像出典】 『啄木写真帖』より	
37	本郷菊坂町の赤心館写真 (パネル)	—	—	—	【画像出典】 『啄木写真帖』より	
38	小説 病院の窓	石川 啄木 著	河出書房	1950	々8/7/9	
39	本郷弓町の「喜之床」写真 (パネル)	—	—	—	【画像出典】 『啄木写真帖』より	
40	石川啄木日記 第2巻	石川 啄木 著	藤森書店	1982	々5/17/2	
41	石川啄木日記1 明治41年6月27日、29日日記(パネル)[『石川啄木日記1』より]	石川 啄木 著	世界評論社	1948	々5/3/1	

No	書名	編著者名	出版者	出版年	請求記号/所蔵先	館外貸出
42	石川啄木ローマ字日記	石川 啄木 著 古沢 岩美 絵	ノーベル書房	1982	㏍5/15	
43	暇ナ時 六月十四日ヨリ (肉筆複製版)	[石川 啄木 著] [函館啄木会 編集]	[八木書店]	[1956. 10]	㏍11/47	

第3章 思想の大きな転換期

No	書名	編著者名	出版者	出版年	請求記号/所蔵先	館外貸出
44	金田一京助随筆選集 2 思い出の人々	金田一 京助 著	三省堂	1964. 12	K090/㏑1/36-2	○
45	石川啄木全集第5巻 新渡戸仙岳宛啄木書簡 明治42年10月10日付(パネル)[『石川啄木全集第5巻』より]	石川 一 著	改造社	1929	㏍8/3/5	
46	啄木書翰集	石川 啄木 著 宮崎 郁雨 編	弘文社	1927	㏍6/1	
47	現代日本文学全集 45 石川啄木集	石川 一 著	改造社	1928	㏍8/9	
48	一握の砂	石川 啄木 著	東雲堂書店	1910	㏍11/42	
49	大逆事件記録 第1巻 獄中手記	神崎 清 編	実業之日本社	1950	210. 68/㏑1/1-1	

第4章 生活から得た哲学

No	書名	編著者名	出版者	出版年	請求記号/所蔵先	館外貸出
50	啄木の終の棲家写真(パネル)	—	—	—	【画像出典】 『啄木写真帖』より	
51	路傍の草花に 石川啄木詩歌集	石川 啄木 [著] 上田 博 編	嵯峨野書院	1999. 4	㏍911. 168/㏑1	○
52	人間啄木	伊東 圭一郎 著 松本 政治 編著	岩手日報社	1974	㏍/㏑7/1	○
53	啄木晩年の金銭出納簿	岩城 之徳 [著]	[日本大学文理学部]	[1971]	㏍/㏑1/13	
54	石川啄木全集 第4巻 評論感想集	石川 一 著	改造社	1929	㏍8/3/4	
55	啄木全集 第10巻	石川 啄木 著	岩波書店	1961	㏍918. 68/㏑1/10	
56	悲しき玩具 一握の砂以後	石川 啄木 著	東雲堂書店	1912	㏍/11/43	
57	啄木遺稿	石川 啄木 [著] 土岐 善麿 編輯	東雲堂書店	1913	㏍8/5	
58	評論 性急な思想	石川 啄木 著	河出書房	1951	㏍8/7/13	
59	呼子と口笛 石川啄木のノート	石川 啄木 [著]	盛岡啄木会 トリョー・コム (発売)	1975	㏍15/10/80	○

啄木と家族の道程

第1章 故郷の家族とあこがれの時代

父・一禎と母・カツ

「よく怒る人にてありし我が父の 日ごろ怒らず 怒れと思ふ」
「たはむれに母を背負ひて そのあまり軽きに泣きて 三步あゆまず」

(『一握の砂』より)

啄木の父・石川一禎(1850～1927)は、幼少期に平館村(現・八幡平市平館)の大泉寺に預けられて仏道を修めます。やがて師・葛原対月の後押しにより若くして曹洞宗の僧侶となりました。その人柄について、息子啄木は短歌で「よく怒る人」と評しています。一方、啄木の友人である金田一京助や伊東圭一郎は「気が弱くやさしい人」だったように思う、と語っています。地方の農村出身の僧侶ながら高い学識を持っていた一禎は、和歌も嗜んでいたようで、生涯に渡り詠んだ3800首あまりの歌稿(歌の原稿)『みだれ芦』を遺しています。



石川一禎(左)と葛原対月(右)
『啄木写真帖』(当館所蔵)より

明治4年(1871)より盛岡・龍谷寺の役僧となった一禎は、そこで対月の妹・工藤カツ(1847～1912)と出会い、対月の許しを得てカツを内縁の妻とします。カツは南部藩士・工藤條作の末娘として盛岡の仙北町に生まれ、社寺の女人禁制が解かれた明治5年(1872)3月以降、兄の対月が住職を勤める龍谷寺に家事手伝いとして身を寄せていました。啄木の日記によれば、カツは「幼かった時は盛岡仙北町の寺子屋で第一の秀才」な女性であったようです。

唯一の男児・一

「ただ一人のをとこの子なる我はかく育てり。父母もかなしかるらむ。」

(『悲しき玩具』より)

明治7年(1874)に日戸村(現・盛岡市日戸)・常光寺の住職に栄転した一禎は、妻のカツとともに日戸村に移り住みます。同9年(1876)には長女・サダ、同11年(1878)には次女・トラ、そして同19年(1886)に長男の一(啄木)が生まれ、一家はこの日戸村で5人家族となりました。

一家にとって初の男の子の誕生に、両親の喜びは大変なものでした。啄木を最(ひいき)にし、わがままに育てるエピソードが多数残されています。啄木の妹・光子は後年、「あま



『悲しき兄啄木』
三浦光子/著 1948

りにも盲目的な愛が兄をああした我儘な人間にしてしまったのだともいへるでせう」と、両親の溺愛が啄木の人格形成に与えた影響について語っています。またこのことは啄木自身にも自覚があったようで、「母われをうたず罪なき妹をうちて懲らせし日もありしかな」「父母のあまりに過ぎたる愛育にかく風狂の児となりしかな」など、反省と自嘲が感じられるような歌を残しています。

■父母の溺愛■

父一禎は自らの名前の頭字をとって「一^{はじめ}」と名付けました。また家財道具一つ作るにも「これは長男のものだ」と、一つ一つに自ら「石川一所有」と書き入れるなどしています。母カツは父に輪をかけて啄木を溺愛し、病弱な啄木のために剣を作って奉納したり、卵と鶏を断って健康祈願をしたり、啄木が夜中に「ゆべし饅頭が欲しい」と駄々をこねると起き出して作ってやるなどのエピソードが伝わっています。

しづたみむら 渋民村と石川家

「渋民！忘れんとして忘れ得ぬのは渋民だ！我を育て、そして迫害した渋民！」

(『ローマ字日記』明治42年4月18日より)



宝徳寺本堂正面(大正11年撮影)
『啄木写真帖』より

啄木誕生の翌年である明治20年(1887)3月、^{しづたみ}渋民村(現・盛岡市)・^{ほうとくじ}宝徳寺に赴任した一禎とともに、一家は渋民村へと移住します。しかしこの宝徳寺転任は、実はその始まりから不穏な空気が漂うものだったのです。

前年の暮れに前住職である^{ゆざとくえい}遊座徳英が急逝し、^{だんか}檀家内では後任住職が問題となっていました。^{いじ}遺児の成長まで代理住職を置くか、正式に他の住職を雇うか、檀家内で意見が分かれたためです。これを知った一禎は対月の縁故を頼り、^{えんこ}檀家有力者に働きかけてやや強引に後任の座を獲得します。しかしその結果、寺を追われた前住職の妻子は居を転々としながらの困窮した生活へと追いやられてしまいました。

こうした経緯から、住民の中には当初から一禎一家に対し反感を持つ一派がいたと言われています。また、田舎には稀な^{まれ}学問好きである一禎が村人にとっては高慢に映り、親しまれなかったとする説もあります。いずれにせよこの一禎と渋民村住民との不和は、後年に石川家が寺を追われる遠因となりました。啄木はこのような状況下の渋民村を故郷とし、「寺の子」と呼ばれながら幼少期を過ごしていくこととなります。

節子との恋愛結婚

「結婚とは〔中略〕心の相結べる男女の更にその体の結同をなす所以の者に外ならず。
結婚は実に人間航路に於ける唯一の連合艦隊也」

(『秋詠笛語』明治35年11月20日より)

啄木が後に妻となる女性・堀合^{ほりあいせつこ}節子と出会ったのは明治32年(1899)、お互い13歳の時でした。

優秀な成績で盛岡中学校に入学した啄木は、次第に文学活動に熱中して学業への意欲を失い、やがて自ら退学してしまいます。この挫折の原因について啄木は「誘惑の女神のため」と語っていますが、誘惑とはおそらく「文学」と「恋愛」の2つを指すのだろうと考えられています。文学への志に理解を示してくれる節子に啄木は夢中になり、後に高等小学校時代の先輩・^{おがさわらけんきち}小笠原謙吉に宛てた書簡では、「恋人は我ならぬ我なれば也(恋人はもう一人の私とでも言うべき存在である)」とまで語っています。この時代の男性としてはロマンチックな恋愛観を持っていた啄木ですが、当時傾倒していた^{ろまん}浪漫主義文学の影響を受けていたのか



婚約時代の啄木と節子
『啄木写真帖』より

もしれません。

ところが明治 38 年(1905)5 月、第一詩集『あこがれ』刊行後に節子と籍を入れた啄木は、あろうことか結婚式をすっぱかしています。この理由についての明確な本人の言は残されていないようですが、直前に起こったある「非常な変動」のために、将来の不安に駆られたからではないかとする説があります。

■浪漫主義時代■

啄木の文学的出発は盛岡中学校時代に会った文芸誌『明星』^{みょうじょう}、およびその誌風である浪漫主義文学から始まります。与謝野鉄幹・晶子^{よさのてっかん あきこ}夫妻をはじめとする浪漫派の作品に大いに刺激を受けた啄木は自らも歌作を始め、明治 35 年(1902)10 月発行の『明星』第三巻第五号に短歌「血に染めし歌をわが世のなごりにてさすらひここに野にさけぶ秋」が石川白蘋^{はくひん}の筆名で初めて掲載されました。上京後は新詩社^{しんし}同人として『明星』を舞台に作品の発表を続け、明治 36(1903)年 12 月号には初めて「啄木」の雅号を用いて長詩を発表し、明治 38 年(1905)5 月には初の詩集『あこがれ』を小田島書房より刊行しました。

これら初期の啄木作品には、古典的・神秘幻想的な明星調が色濃く感じられます。浪漫派の模倣の域を脱していないとして初期作品の文学史的評価は高いとは言えませんが、生涯に渡って変遷していく、文学者啄木の土台となったことは確かです。



『あこがれ』
石川啄木／著 1905

父の住職罷免・故郷との別れ

「石をもて追はるごとく ふるさとを出でしかなしみ 消ゆることなし」

(『一握の砂』より)

啄木の身に起こった「非常な変動」とは、明治 37 年(1904)12 月、父・一禎^{そうひ}が宗費の滞納を理由として曹洞宗総本山より宝徳寺住職^{ひめん}を罷免され、一家の扶養義務が突如として我が身に降り掛かってきたことを指します。『あこがれ』刊行のために上京していた啄木がこの事件を知ったのは翌年 3 月のことでした。これから文壇へ羽ばたかんとする時期に、文学を捨てての帰郷を余儀なくされた悔しさや、見通しが立たない前途への不安などに見舞われた啄木は、これらの現実から一時的に逃れるため、節子との結婚式をボイコットするに至ったのではないかと考えられています。

故郷に戻った啄木は渋民尋常小学校の代用教員として働く傍ら小説を執筆し、さらに一禎派の檀家とともに父の再住に向けて奔走します。収入は少なく生活は苦しいものでしたが、明治 39 年(1906)3 月には曹洞宗本山より懲戒赦免^{ちょうかいしゃめん}の吉報が届きました。また同年 12 月には啄木と節子の第一子・京子^{きょうこ}が誕生し、一家に開運の兆しが見えたかに思われました。

しかし明治 40 年(1907)3 月、何を思ったか一禎は突然の家出を決行し、約一年に渡る再住運動はご破算となってしまいます。家出の理由は定かではありませんが、家の窮状を見かねて、または精神的重圧に耐えかねてのことではないかと考えられています。

そしてその翌月、啄木自身も校長排斥のストライキ事件を起こして代用教員を免職され、一家は追放される

ように浜民村を去ることとなってしまいます。後年啄木は故郷浜民を請い懐かしむ歌を多く残していますが、これ以降、浜民の地を踏むことは二度とできませんでした。

第2章 一家扶養の現実の中で

漂泊の北海道

「わがあとを追ひ来て 知れる人もなき 辺土に住みし母と妻かな」

(『一握の砂』より)

浜民での生活に行き詰まった啄木は新天地を北海道に定め、長年暮らした故郷をあとにします。明治40年(1907)5月、生活基盤を整えるために先んじて渡道し、同年9月には各地に離散していた家族を呼び寄せました。

北海道時代の啄木の生活は、函館、札幌、小樽、釧路と道内を転々とする不安定なものでした。のちの義弟・宮崎郁雨^{みやざきいく}をはじめ多くの友人を得た函館を大火によって去ったのちは、各地で新聞記者として働きその才能を発揮します。しかし高い自尊心ゆえに周囲との摩擦を起こし、いずれも短期間で退社してしまいます。北海道の地で一度はまとまった家族も、こうした啄木の行動によって更に困窮していきました。家族に対する愛情を度々日記に記しながらも、創作活動もままならず、一家扶養の責任も果たせない状況に、啄木自身も次第に追い詰められていきます。

漂泊するような生活の末、啄木は自らを「生活に適合せぬ男」と批判するに至ります。家族を函館の宮崎郁雨に託し、「事情の為にやれなかつた文学をやつてみる外にモウ何の路も自分の前になかつた」と、自らと家族の命運を賭けて最後の上京を行うのでした。



函館・苜蓿社同人
『啄木写真帖』より

■義弟・宮崎郁雨■

函館時代から啄木を手厚く支援したことで知られるのが、文学結社・苜蓿社^{ぼくしゆく}の同人であった宮崎郁雨(本名・大四郎^{だいしろう})です。郁雨は味噌製造業を営む一家の長男として家業に従事し、軍人としての顔も持っていました。対照的な性格の二人は文芸活動を通じ急速に親しくなります。文学的な才能を持ち、節子との恋愛を成就させていた啄木は郁雨にとって一種の憧れの対象でもありました。啄木も郁雨について、作品や日記のなかで「智慧と深き慈悲」を持った「眞の男」と称えました。

函館を去った後も友情と支援は続き、創作専念のため上京する際には家族を託すほどの信頼関係を築きました。その後、郁雨が節子の妹・ふき子を妻として迎えたことで二人は義兄弟の関係となります。

郁雨の厚意に精神的にも支えられた啄木でしたが、後年ある出来事がきっかけとなり義絶^{ぎぜつ}に至ります。信頼関係の崩壊は啄木にとって大きな衝撃となり、晩年の創作活動停滞の一因と考えられています。



郁雨と妻・ふき子
『啄木写真帖』より

「ただ一つ家して住まむ才能をわれにあたへぬ神を罵る」

(歌稿ノート『暇ナ時』より)

明治 41 年(1908)4 月、上京した啄木は同郷の友人・金田一京助を頼って本郷菊坂町の赤心館に転がり込み、命運を賭けた小説執筆に入ります。しかし、次々に書き上げた小説はいずれも評価されず、啄木を酷く落胆させることとなります。さらに、家族を3ヶ月～半年の約束で函館に預けてきていたため、文学に専念できる時間も無制限ではありませんでした。追い詰められた啄木は精神的に不安定になり、自死まで考えている様子が当時の日記に残されています。

翌年3月、東京朝日新聞社に就職し東京における一応の生活基盤が整ったことで、先送りにしていた家族扶養の重責が再び啄木にのしかかります。この頃からつけ始めた『ローマ字日記』には、「家」の束縛からの逃避を享楽に求めた破滅的な生活の様子と共に、家族や故郷への悲痛な心境、当時の家族制度への反発などが赤裸々に綴られました。

明治 42 年(1909)6 月にはついに函館から老母と妻子が上京し、啄木は本郷弓町の床屋「喜之床」の二階を間借りして再び家族との同居を始めます。

■小説失敗の原因■

啄木研究の第一人者である岩城之徳氏は、啄木の小説が評価を得られなかった原因を、以下のように考察しています。

当時の文壇では、衰退しつつあった浪漫主義文学に替わり、自然主義文学が隆盛していました。自然主義とは、架空性や美化を排除し、現実をありのまま描写することを目指す創作態度を指します。自然主義作家たちは当時の日本における「家」の課題を中心問題として小説を書き、「家の抑圧」と「自己実現」とのジレンマがいかに人間を墮落・腐敗させていくのか、ということを表現しました。

啄木はこの「家」の悲劇を誰よりも背負った作家であるにもかかわらず、それを小説で表現しようとはしませんでした。それどころか、自分の「家」の問題を意識的に避けている印象さえ受けます。これは啄木の強い自尊心が自らの弱みをさらけ出すことを許さなかったためと思われるが、当時の文壇の潮流においては致命的な欠陥となるものでした。

■あふれ出す短歌■

自身に唯一残された道であった文学での挫折は啄木を深く絶望させましたが、この追い詰められた生活の中で突然歌のイメージがあふれ、短期間で数百首の短歌が生み出されました。特に明治41年(1908)6月23日から27日の5日間にかけては、なんと260首もの歌を詠んでいます。これらの短歌には、家族への想いを直截に歌ったものも多くあります。啄木は自身の歌作について、「ちやうど夫婦げんかをして妻に敗けた夫が、理由もなく子供を叱ったり虐めたりするやうな一種の快感を、私は勝手気儘に短歌といふ一つの詞形を虐使することに発見した」と語っています。手慰みの玩具のように詠まれた短歌だったからこそ、小説作品では描けなかった家庭の実情や自身の苦悩をありのままに表現できたのかもしれません。

この時期の短歌は、歌稿ノート『暇ナ時』にまとめられ、後の『一握の砂』への足掛かりとなります。

■実妹・石川ミツ（三浦光子）■

啄木とともに数奇な人生を歩んだのが、妹である光子です。一家が宝徳寺に移住した翌年の明治 21 年(1888)に、末子として生まれました。経済的事情から盛岡女学校を退学せざるを得なかった光子は、明治 40 年(1907)に啄木と共に渡道し、小樽のメソジスト教会で洗礼を受けます。そこからクリスチャンとしての道を歩み始め、明治 43 年(1910)には名古屋の聖使女学院へ進み、寺の生まれでありながら婦人伝道師としてその生涯を全うしました。

共に勝気な性格で衝突することも多かった兄妹ですが、同時に家庭内で唯一波民村の思い出を共有できる同志でもありました。上京時代の「ローマ字日記」には、光子から故郷を懐かしむ内容の手紙を受け取り、「予とともにシブタミを忘れえぬものは どこにあるか！ 広い世界に ミツコひとりだ！
（『Romazi nikki 啄木・ローマ字日記』桑原武夫^{くわばらたけお}／編訳より）」と、その心情を吐露しています。また、兄らしいふるまいができなかったことを後悔し、妹の境遇とその行く末を案じる言葉を残しました。

第3章 思想の大きな転換期

節子の家出

「女あり わがいひつけに背かじと心を砕く 見ればかなしも」

（『一握の砂』より）

『ローマ字日記』に記されたような「家」の束縛からの脱出を願う気持ちや、「家族制度」に対する激しい反発意識は、家族との同居を再び始めた後も啄木の中で^{くすぶ} 燃れ続けます。それは家族に対する否定的な態度となって現れ、東京での新生活は次第に行き詰まっていきました。特にそのしわ寄せを受けたのが妻の節子でした。函館時代の無理がたたって身体の不調に苦しむ妻に対し、啄木は何の処置も施そうとはしませんでした。また嫁姑間の確執が生まれていた母・カツも、節子に対し冷淡な態度を取っていたようです。

こうした生活環境にたまりかねた節子は、明治 42 年(1909)10 月 2 日の朝、娘の京子連れて盛岡の実家へ帰ってしまいます。妻からの愛情と献身を疑わなかった啄木は、この突然の家出に慌てふためきました。金田一京助や盛岡の恩師・新渡戸仙岳に説得を依頼し、また自身も再三に渡り帰宅を願う連絡をしています。

節子は3週間余りの静養の後に啄木の元へ戻ります。しかし、この家出事件が啄木に与えた精神的打撃は大きく、その後の思想や作風にも影響を及ぼしました。

「謂ふ心は、両足を地面に喰つ付けてゐて歌ふ詩といふ事である。実人生と何等の間隔なき心持を以て歌ふ詩といふ事である。」

(『食ふべき詩』より)

節子が出家をした翌年の3月、啄木は宮崎郁雨に宛てて「去年の秋の末に打撃を受けて以来、僕の思想は急激に変化した。僕の心は隅から隅まで、もとの僕ではなくなった様に思はれた」と書き送っています。北海道～東京での苦闘を経て、啄木は現実と根差した人生と向き合い始めていました。さらに節子の出家事件を契機として、これ以降は現実の生きた生活感情を歌う作風を形成していきます。

事件後に書かれた評論「食^{くら}ふべき詩」には、「実人生と何等の間隔なき心持を以て歌ふ詩」と、啄木の新しい文学観が提唱されています。また43年(1910)12月には、第一歌集『一握の砂』が刊行されます。その冒頭には「明治四十一年夏以後の作一千余首中より……」とありますが、啄木は出版までの間に添削を繰り返しており、実際の収録歌は43年に詠まれたものが8割以上を占めているようです。これはもちろん、43年以降に起こった著しい歌風の変化によるものでしょう。既成概念にとらわれず率直にその生活感情を吐露した『一握の砂』は、三行書きという新しい表現手法も相まって、歌壇に新風を吹き込みました。



『一握の砂』
石川啄木/著 1910

■長男・真^{しんいち}一の誕生と死■

啄木が第一歌集の出版を計画したのは明治43年(1910)4月でしたが、その際には実現に至らず、再び歌集出版を思い立ったのは妻節子の出産が近づいた半年後のことでした。大学病院の入院費用を捻出するため原稿を出版社に持ち込み、長男・真一が誕生した10月4日に東雲堂^{とううんどう}との契約が成立して20円^{とううんどう}の原稿料を得ています。啄木は長男の誕生について、「今度生れたるは男の子にて真一と命名いたし候、『一握の砂』が産婆の役をつとめたる次第に候。」と、友人の岡山儀七^{おかやま ぎしち}宛書簡に書いています。

しかしその真一は、わずか24日でこの世を去ってしまいます。『一握の砂』の最初の校正刷りが出たのは、葬儀が行われた10月29日の夜のことでした。啄木は「底知れぬ謎に對ひてあるごとし/死児のひたひに/またも手をやる」他、挽歌(死者を悼む詩歌)8首を『一握の砂』の原稿に追加しています。これらの短歌からは、早すぎる息子の死に呆然とし、未だ悲しみを感ずる余裕のない啄木の心境が伝わってきます。

第4章 生活から得た哲学

病と貧困、家族の支え

「石ひとつ 坂をくだるがごとくにも 我けふの日に到り着きたる」

(『一握の砂』より)

明治44年(1911)8月、節子の肺尖カタル診断を受けた一家は、終の棲家となる小石川久堅町の借家に移ります。晩年の一家の生活は、義弟・宮崎郁雨との義絶(親族としての縁を切ること)によって経済的支援を失い、また母・カツの結核が原因で家族全員の健康状態が悪化するなど、病と貧困がつきまとう辛いものでした。しかし、こうした状況の中でも、最後まで啄木を支え続けたのは母と妻の存在でした。



啄木の終の棲家
『啄木写真帖』より

母・カツは啄木にとって非常に大きな存在であり、特に老母のイメージは長詩「馬車の中」や小説「母」、その他多くの短歌の題材となりました。こうした作品からは、周囲から人一倍母思いと評される啄木の心情を窺うことができます。

夫の非凡な才能を信じ、生活苦に耐え続けた妻・節子もまた、啄木の人生に欠かすことのできない存在でした。節子の愛情と文学への理解は啄木にとっての大きな支えであり、その創作生活は妻の献身の賜物でもありました。啄木の死後も節子のこうした姿勢は変わらず、困窮する生活のなかでも日記や遺稿を守り、その思想を今日に伝える役割を果たしました。

■宮崎郁雨との義絶■

明治44年(1911)9月、啄木は義弟・宮崎郁雨と義絶に至ります。いわゆる「不愉快な事件」等と称されるこの出来事は、節子一人の写真を送ってほしいと書かれた匿名の手紙が発端となりました。郁雨からの手紙であると悟った啄木は激怒し、節子に離縁を申し付けます。その後、郁雨が石川家との交際を取り止めることで事態は収束しましたが、良き友人であり最大の支援者でもあった郁雨との義絶は啄木にとって大きな痛手となりました。これ以降主だった作品の発表がなかったことから、この出来事が精神的な打撃であったことが推察されます。

経済的支援を失った啄木は、生活を改善すべく節子に金銭出納簿をつけることを命じました。明細な記録からは、自身も病身の上身重であった節子が、家庭を守ろうと心を砕く様子を窺うことができます。この金銭出納簿は啄木の死の翌日までつけられ、日記が途絶えがちだった晩年の生活を伝える貴重な記録資料となりました。

望郷のころ

「あはれ我がノスタルジヤは 金のごと 心に照れり清くしみに」

(『一握の砂』より)

啄木の人生における故郷の喪失は、父の住職罷免という家庭の事情に基づくものでしたが、作品の中で歌われた都会の生活における孤独と強い望郷の念は、近代化によって都会に進出した多くの大衆の苦悩と一致し、広く共感を得ました。

都会での挫折を経てさらに深まった望郷の念は、その思想にも影響を与えました。晩年には、近代化によって疲弊する農村や、都会に進出した民衆の孤独感に注目するようになっていきます。こうした視点は評論「農村の中等階級」や「田園の思慕」に繋がり、啄木はこれらの作品の中で、近代化が農村と都会にもたらす矛盾について問題視しています。また、地方から都会へ定住した民衆の内面に注目し、年月の経過とともに故郷という思慕すべき対象が人々の心から次第に失われていく悲劇を鋭く予見しています。

美しき故郷・渋民村への強い望郷の念は、数々の優れた作品の題材となっただけでなく、近代という時代を捉える鋭い視座を与え、文学者・思想家としての啄木を構成する重要な要素の一つとなりました。

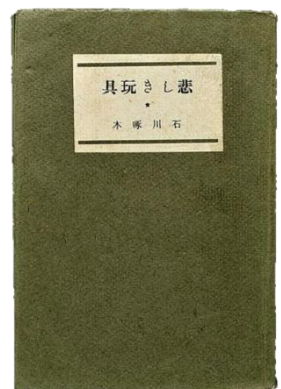
家族と歩んだ道程

「新しき明日の来るを信ずといふ 自分の言葉に 嘘はなけれど——」

(『悲しき玩具』より)

父の住職罷免による故郷喪失を出発点として、啄木の思想はその生涯を通じ大きく変化していきました。一家扶養の責任を一身に負う生活の中で、啄木は当初の幻想的な浪漫主義文学の世界から離れ、自然主義や社会主義への共鳴を経て、自身の生きる社会の問題点と向き合うようになっていきます。こうした背景には、啄木自身の家庭や社会における度重なる挫折がありました。苦しい生活の経験は文学の意義すらも変化させ、節子の家出事件以降には実生活と文学との統一を目指すようになります。評論や創作といった文学的手法を用いて啄木が志したのは、自身の置かれている今日の現実を直視し、明日の生活の改善に努めることでした。広く民衆に親しまれてきた短歌の数々も、未来の改善に向け自己を見つめなおすための生活の記録です。こうした啄木の思想は、当時文壇の主流であった自然主義の行き詰まりを打破し、近代文学の発展に貢献しました。

自身の境遇に苦しみ、「家」の束縛から逃れることを願った啄木。しかし、苦しい生活の中でも自らと向き合うことを止めず、家族と共に生きようともがき続けた道程があったからこそ、今日まで愛される啄木文学は成立したと言えるのではないのでしょうか。



『悲しき玩具』
石川啄木／著 1912

■主な参考文献■

- ・『石川啄木』岩城 之徳／著 吉川弘文館 1985.7
- ・『啄木の父一禎と野辺地町』高松 鉄嗣郎／著 青森県文芸協会出版部 2006.9
- ・『かなしき時は君を思へり 石川啄木と五人の女性』山下 多恵子／著 未知谷 2020.10
- ・『兄啄木の思い出』三浦 光子／[著] 理論社 1973
- ・『啄木写真帖』吉田 孤羊／著 改造社 1936
- ・『啄木の妻節子』堀合 了輔／著 洋々社 1981
- ・『石川啄木と北海道 その人生・文学・時代』福地 順一／著 東京 鳥影社 2013.5
- ・『金田一京助全集 第13巻 石川啄木』金田一 京助／[著] 金田一京助全集編集委員会／編 三省堂 1993.7
- ・『Romazi nikki』[石川 啄木／著] 桑原 武夫／編訳 岩波書店 1978
- ・『啄木「ローマ字日記」を読む』[石川 啄木／原著] 西連寺 成子／著 教育評論社 2012.4
- ・「『明日』の考察！啄木の晩年」土岐 善麿／著（改造第5巻第6号 211～226p収録）改造社 1923.6
- ・『石川啄木の手帖』国文学編集部／編 学灯社 1978
- ・『人間啄木』伊東 圭一郎／著 松本 政治／編著 岩手日報社 1974
- ・『石川啄木日記』第1～3巻 石川 啄木／著 藤森書店 1982
- ・『石川啄木全集 第3巻 詩歌集』石川 一／著 改造社 1928
- ・『石川啄木全集 第4巻 評論感想集』石川 一／著 改造社 1929
- ・『石川啄木全集 第5巻 書簡附年譜』石川 一／著 改造社 1929
- ・『啄木書翰集』石川 啄木／著 宮崎 郁雨／編 弘文社 1927

お願い

当館では石川啄木に関する資料を、網羅的に収集するよう努めております。「第36回啄木資料展」では、令和4年8月1日から令和6年7月31日までに収集した資料を展示しました。この2年間に出版、または製作された資料のうち、この目録にない資料をご存知でしたら、県立図書館までお知らせくださるようお願いいたします。

岩手県立図書館では郷土に関する資料を集めています

郷土に関する資料とは、次のようなものです。

○岩手県内に住む人または岩手県出身の人が書いた資料（※）

○岩手県に関する内容、または岩手県に関係がある人のことを書いた資料（※）

（※資料…図書、雑誌、小冊子、CD、DVD、CD-ROM など）

このような資料を出版、製作された場合は、県立図書館へ御寄贈くださいますようお願いいたします。岩手県の貴重な文化的資料として、永く保存していきます。

御寄贈は、できるならば**2部（貸出用・保存用）**をお願いしております。

<送付先> 岩手県立図書館 資料管理担当

〒020-0045 盛岡市盛岡駅西通一丁目7番1号

(TEL) 019-606-1730

展示資料目録

第36回 啄木資料展

発行日 令和6年10月27日

発行者 岩手県立図書館

〒020-0045

岩手県盛岡市盛岡駅西通1-7-1 いわて県民情報交流センター・アイーナ内

TEL 019-606-1730 FAX 019-606-1731

HP アドレス <https://www.library.pref.iwate.jp/>

